イベリア半島を旅して

— ユーラシア西端の野の花 —

大　賀　二　郎*

はじめに

1987年4月，イベリア半島を旅行した。

バスによる線の旅であった。果てしなく続く田園，原野，丘陵，白壁の片田舎，荒れ果てた裸岩地帯，ときおり城壁や廃墟がシルエットになって現われる。ローマ時代の水道橋の下を潜ったり，岩山の修道院を仰いだり，陽光さんさんとして眩いばかりであった。

スペインのマドリッドから中世都市トレドへ。空路でポルトガルのリスボンへ。そこからバスによる長い旅となる。大陸最西端のシントラ，ロカ岬へ。再び陸路で国境の町バタッホスを経てスペインに入り，セビリア，ゴルトバ，カサレス，グラナダへ。更に太陽海岸（コスタ・デル・ソル）を通ってトリモリノス，アルヘシタスへ。そこからジブラルタル海峡を連絡船でモロッコへ，の旅であった。

イベリア半島の野の花

私たちは，主に半島中南部を廻った。風になびく小麦畠，ヒマワリの斜面，礫地にはオリーブ。しかし，移り行く風景の多くは野草の拡がる原野であった。

どの地方も野の花の盛りであった。種類は決して多くはないが，野ゲシ，シュンギク，野生グラジオラス，野アイリス，ラベンダー，野バラ，アザミ，オオバコ，ワスレナグサ，キズイセンなどが目についた。町にも，辺境にも，山間部にも，海岸にも，それは広がっていた。

系統としては，たで科，けし科，あぶらな科，ばら科，まめ科，すみれ科，せり科，つつじ科，むらさき科，しそ科，おおばこ科，ききょう科，きく科，いね科，ゆり科，あやめ科，らん科などが多いように思えた。しだ類，こけ類などの陰花植物は，殆んど見かけなかった。

夏は極端に雨量が少なく，暑熱の地である。春に一斉に開花し，結実する。夏には枯れて種子を残すか，根茎を残す。

石灰岩質，乾燥風土に適応して，茎葉が硬く，精油成分をもったものがある。ラベンダー，セイジなどの香気植物ハーブである。

一般的に色彩は深く，清楚である。そして矮生のものが多かった。紫外線の強い陽光のためであろう。

花色は，赤，青，黄，白，紫などが基調となっている。色彩が多様なのは，花粉を媒介する昆虫が，種類ごとに分担しているように思えた。

野の花で特に印象的なのは，真紅の野ゲシであった。白亜の傍らにも，麦畠のなかにも，厳粛荘重な教会の裏庭にもあった。その姿は燃えるように美しく，またどことなく哀愁があった。

イベリア半島の野は，戦いの歴史の地であった。幾多の血が流された。その血のように鮮烈で，風にゆれる姿は，何かを訴えているようであった。

この種のケシの種子は，紀元前2,500年頃のエジプトの墳墓のなかから，オオムギの粒にまじって発見されている。古代から地中海沿岸諸国に広く野生していたとみられている。姿は弱々しいが，強靭な生命力である。

当地方の野ゲシは，遠目には同種のように見えるが，Papaver argemone, P. dubium，および P. rhoeas の3種が混生しているといわれる。

イベリア半島の自然と文化

イベリア半島は，北部にカンタブリア山脈，南部にシェラモレナ山脈とシェラネバタ山脈，その間の中央部は海抜500メートル前後の台地になっている。そのような地形の上にアフリカからのモロッコ風，ピレネーから吹き下ろすミストラル風そして大西洋の暖流の風。天気はいいが，絶えず風が流れる。

イベリア半島は，また広大なユーラシア大陸の西端であり，この先は茫洋とした大洋である。ある時代までは，民族も，文化も，そして同じく生物も，ここから越えることができなかった。長い移動を経て，ここにたどり着き，そしてあるものは，ここで定着した。

アフリカ大陸とは，幅13キロメートルのジブラルタル海峡によって，わずかに切れる。

地中海は，閉ざされた海の状態である。塩分濃度が高く，プランクトンが少ない。そのため生物相の貧弱な海

* 神戸市長田区片山町1丁目24-3

といわれている。沿岸の陸地も概して石灰岩や礫層の乾燥地が多い。海と同じく，生物の繁殖にはめぐまれていない。

地中海沿岸諸国いわゆるマグレブ地帯の気候風土は一体的な関係にあり，生物相も類似しているといわれている。

コスタ・デル・ソルやコスタ・デル・ルス（光の海岸）は，ヤシ，リュウゼツラン，ホウオウボク，ジャラカンダなどが茂り，アフリカ的な植物景観である。

イベリア半島の歴史は，幾世紀にもわたり，破壊と修復の繰り返しであった。先住民族ケルト族の地から，ローマ帝国の支配があり，ゲルマン民族の侵入があり，8世紀には回教徒によるイベリア支配があり，そしてまたキリスト教徒による国土再征服があった。絶えざる戦乱の地であった。自然の破壊も免れなかった。

更には，原野には放牧，林床には火入れで自然は殆んどなくなった。どんな辺境の山野も二次殖生になっている。

広大な国土を旅していると，打ち続く原野や田園の地平線上に，島のように中世都市が現われてくる。

土に還りつつある遺構もあった。かっての栄光は，今は死の都市になっている。列柱の間に石畳が続く。壁面装飾が残っているものもある。崩壊廃墟のなかには，野草の群落があった。乾き切った大気のなかで，寄り添って咲いていた。静寂のなかで，花の群れが鋭い光を放っていた。

イベリア半島を旅して，特徴的だったところを次にあげてみた。

ト　レ　ド

（中世都市と緑地空間）

マドリッドからトレドに向う道は，単調な小麦畠が続く。バスで2時間あまり，突然，河に面して塁壁が見えてくる。重厚なムデハル形式の門，六角形の塔をもつ橋。都市の入口だ。曲がりくねった石畳をたどると，古色蒼然とした建築物が迫ってくる。中世の静けさが，ひしひしと感じられる。

中世都市は，一般的に植物が生育する空間にとぼしい。塁壁に囲まれた城郭都市は，いわば巨大な軍艦のようなものであったろう。

街のなかは，建物も，道路も，広場も，石で固められている。土の露呈するところが少ない。

そのためか，住居に中庭（パテオ）をもったところが多い。観葉植物やつる性植物が壁にからんでいて，ちょっとした緑の空間をつくっている。画家エル・グレコの家は廃墟になっていた侯爵邸だったところだが，その典型である。

また塁壁の間に根をこじ入れ，入道のように枝葉を拡げる常緑樹や，聖堂の壁の亀裂から花をつけている野草もみられた。自然の力を見せつけられた。

トレドは中世の城郭都市で，三方をタホ河に囲まれている。対岸から見るトレドの全景は，胸に迫るものがある。

13世紀のゴシック調のカテドラル，威圧するようなアルカサル（城郭）を中心に，中世の街がそっくりそのままに残っている。まさに時間が止ったような気がする。

タホ河は深い谷で，河岸は急なスロープになっている。土手はむかしからの地面がそのまま露呈していた。シュンギク，ワスレナグサ，アザミ，アイリスなど，一面の花盛りであった。

カサレス

（廃墟と植物群落）

ジブラルタルの北方40キロメートル，海抜500メートルぐらいのところにカサレスの町がある。途中の道筋は殆ど岩山で，斜面にはところどころコルクガシの林があった。10メートルぐらいの大木もあり，下部の樹皮は剝ぎ取られて痛々しいが，枝葉を大きく拡げていた。ヘアピンカーブの道路を車で登っていく。1,500メートル前後の山岳が見えたり隠れたりする。次のカーブを廻ったところで，誰もが歓声をあげますよとガイドがいう。

視界が突然開けた。眼前に孤島のようにそそり立つ岩山があって，白亜の家がぎっしりと張り付いていた。頂上には，高い廃墟がシルエットになっている。城塞の一部も残っている。真昼の太陽，無限の蒼空のなかで，それは眩しいばかりであった。

レストランでのランチもほどほどにして，岩山を登る。白壁の家の間を，細く廻りくねった道だ。

頂上は小さな台地になっていて，遺跡が群がっていた。中心に中世ロマネスク教会の廃墟があった。礼拝堂の半分は崩れ落ち，蔦葛の類が静脈のように張り付いていた。風の通るところの岩石には黄色の地衣類が付着していた。破壊された砦，石畳，石柱が累々と転がっている。それらの間には，草本が群落をつくっていた。野ゲシ，ラベンダー，ヘラオオバコ，ヤコブボロギク，アザミ，ワスレナグサなどやきんぽうげ科，せり科，しそ科のものもあった。

遺跡のあるところは，地形としては概して高地が多い。風が流れ，日照時間が長い。石片や礫が散在していて，光と影がはっきりしている。乾燥地が多いが，石間など

は温度の上下降を防ぎ，一定の水分が保たれる。また巨石などによって高木が育たず，枝葉によって日光を遮られることがない。

かっては，文明が栄えたところ。気候風土がよく，また交通の要衝だったことが考えられる。そのルートに乗って，他地方の植物も渡って来たことだろう。

地形上，「陸の島」としての位置を占め，鳥類や昆虫の渡来地や繁殖地になっていることも想像される。そこでは植物との共存関係ができる。また丘陵や台地は，種子などの吹き溜りになりやすい。

また，かって集落があったところでは，地味も豊かであろう。

以上の点から，遺跡には意外と特異な草本が多く，高山植物に似た小群落をつくる。多年生が多く，領域が明確で，毎年同種が同じ岩間で花をつけていることだろう。

コルトバ

（窓辺の花・人口庭園）

コルトバは，カルタゴ人によって開かれ，８世紀に栄えた古都である。ローマ橋，大モスク，アルカサール。かっての栄光と凋落。どっしりとした歴史の重みを感じる。

しかし，一般の居住区域に入ると，途端に明るくなる。街そのものが白く輝いて見える。家の間の花の小道を歩くと，どこからでも小鳥の囀りが聞かれる。白壁の窓は，色とりどりの花鉢で飾られている。少し大きな家には内庭（パティオ）があって，彫像や噴泉が設けられている。モンステラなどが一面にからんでいる。

ラテン系の人は，一般的に楽天的で，食べることや飾ることに興味をもつ。南欧の街は，どちらかといえば人工的で，華麗に飾られている感じがする。

一方，北ヨーロッパの人は，冷静で，自然に愛着を持つ。自然のなかに生きることを理想とする。その地方の国土は，広大な自然が保護されているといわれる。

両者には大きな差がある。

コルトバを始めとして，セビーリヤ，グラナダなどいわゆるアンダルシア地方の街は，きわめて装飾的である。山野の緑も殆んど人の手にかかったものと思われる。野生の残っているところはないのではないか。

グラナダのアルハンブラ宮殿は，整然とイトスギが立ち並び，庭園はバラなど原色の花で溢れている。その緑のなかに，輝くばかりの宮殿が蒼空に聳える。幾何学的な石の世界である。また植栽林と園芸植物の世界である。その当否は別として，ここには一握りの自然も残されていない。

この地方の文化は，いわば装飾文化である。イスラム文化が根強く残っている地域である。草木の乏しい乾燥地帯に生まれた文化。その地方では，すべて無から築き上げていかねばならない。そのような伝統があるのだろう。

ロ　カ　岬

（ユーラシア大陸最西端の野の花）

ポルトガルのロカ岬。ひょうひょうと風が鳴っていた。最先端の岸壁の上に十字架が立っていた。

「ここに地が尽きて，海がはじまる。」胸に迫ることばである。カモインスの詩の一部が，そこに刻まれていた。

壮大なユーラシア大陸は，東端はベーリング海峡にはじまり，アジア，ヨーロッパと拡がり，西端はこの小さな岬で終わる。

この先は，もう島影ひとつない茫洋とした海である。

このあたり，海岸は14キロメートルにわたって，急激に海に落ち込む絶壁が続いている。砂浜らしいものはない。

一方，岸壁の上は，広い台地になっていて，黒い海に対し，明るい光に満ちていた。風がいつも渡っているためか，灌木すらなく，岩場の間に野草が群落をつくっていた。特に多肉植物のマツバギクが大きな領域を占め，満開であった。気候温暖で乾燥していることを物語っている。ほかにフロッグスやキンポウゲの類が寄り添って咲いていた。

リスボン市から30キロ，距離は差程遠くはないが，原始のままの静けさであった。人影はまばら，野の花の群落のなかに，逆光に映える人の姿が，特に旅情を誘った。

ロカ岬に出る途中に西端の町シントラがある。岩山の稜線には，ムーア人の城塞跡が連なる。

市中にはペナ城，モール城そして中央部には14〜17世紀にかけて築造されたおとぎの国のようなシントラ城がある。このあたり温泉もあり，リゾートの町である。

大陸がここに尽きる。

それは地理的な終末地にとどまらない。西欧文明の終焉地点であり，生物分布に関しても同じことがいえるだろう。

特に生物相は豊富である。ここは亜熱帯植物にうずもれて，みずみずしいばかりであった。巨大なリュウゼツランが石塀に沿って立ち並び，廃墟の石の間にはウチワシャボテンやアロエの群落があった。

ホテルのロビーには，このあたりに生息する動物の標

本が置かれていた。ハリネズミ，メンフクロウ，ミミズク，アオゲラ，ムクドリなどの特異な種類が目についた。

おわりに

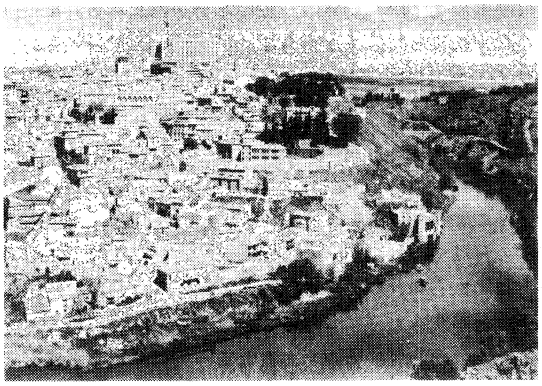
春，イベリア半島は花で埋まる。町は聖週間や花祭りで。原野は野の花で。地中海からの暖かい風に揺れながら，人も，花も，春を謳歌する。

この地方の在来種も，とおい地から辿り着いた渡来種も，お互いに領域を分かち合って共存している。

広大な原野も，白亜の町も，聖堂や廃墟の傍らも，野の花の饗宴であった。

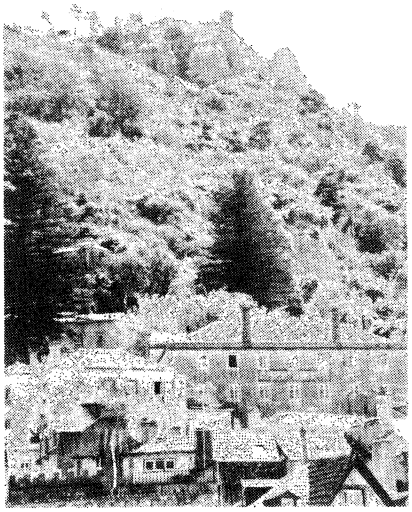
参考文献

原色世界植物大図鑑	1986	林　弥栄 古里和夫
世界の花（ヨーロッパ）	1983	大場達之
ヨーロッパ・野の花の旅	1978	安野光雅
海外花の旅	1983	矢野　勇
Eurasia	1964	Francois Bourliere
Ecology	1963	Peter Farb
The Pictorial Encyclopedia of Plants and Flowers	1965	J.G.Barton

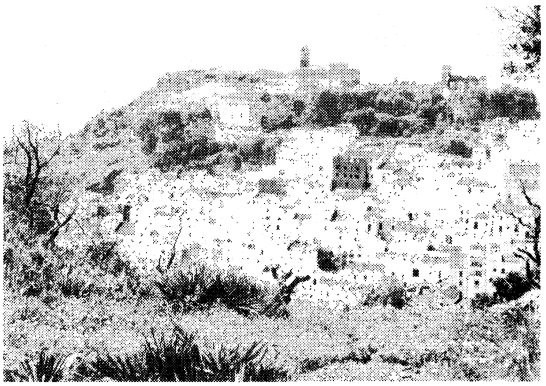


中世都市トレド
往時そのままの土手が残っている

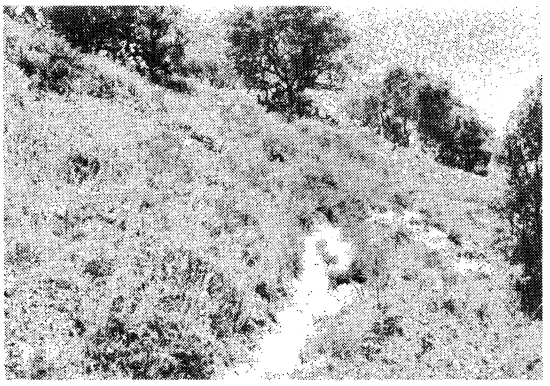
ユーラシア最西端のロカ岬
春，野の花で埋まる



ユーラシア西端の町シントラ
山頂にムーア人の城が残っている

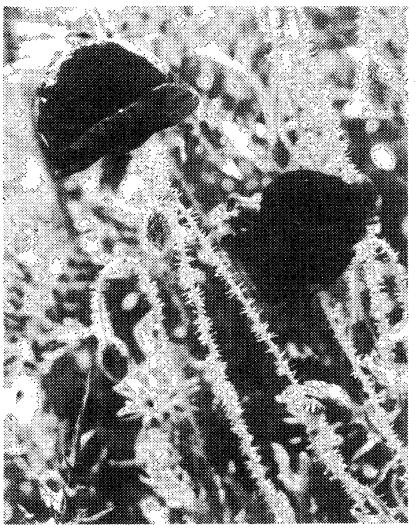


ジブラルタル北方のカサレスの町

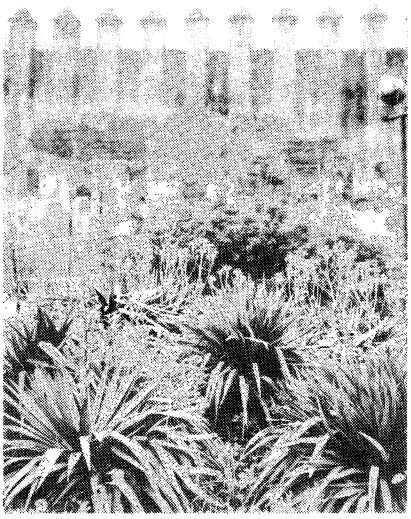


イベリア半島原野の一般的風景

カサレスの遺跡と野の花の群落



イベリア半島を彩る野ゲシ



ユッカ，アロエの類に
取り囲まれた中世の城壁

コルクガシの大木
下部の樹皮が剝ぎ取られている